

令和2年度 優秀卒業論文賞総評

優秀卒業論文賞選考委員会 委員長 高井 透

1. 審査の方針と概要

審査は、各ゼミナールから推薦された卒業論文を、学術的な形式、研究方法論、論文内容の論理構成、インプリケーションの妥当性などの多角的な視点から委員の先生方に審査して頂いた。各委員は二人一組となり、各論文をそれぞれ評価していくという方法を取った。二人で評価することにより、より客観性が担保されるからである。このような審査基準とプロセスを経て、9編の論文が優秀卒業論文賞の基準を十分に満たしていると判断された。

2. 優秀卒業論文9編の執筆者とタイトル(執筆者五十音順)

- (1)秋元一哉 「雑誌『装苑』からみるデザイナーズブランドの身体性とその展開—1980年代から現代まで」 (服部訓和ゼミナール)
- (2)江森 航一 「特殊撮影史における日本特撮の独自性」 (小島智恵子ゼミナール)
- (3)大沢 佑佳 「持続可能な観光振興のあり方をめぐって～新型コロナウイルス前後の比較検討～」 (木下征彦ゼミナール)
- (4)小松原 宏太 「地域銀行の現状と未来」 (相澤朋子ゼミナール)
- (5)高野玲菜 「オンライン授業の課題とその解決策～with コロナ時代の新しいコミュニケーション～」 (東るみ子ゼミナール)
- (6)玉井 誠 「新卒就活市場におけるミスマッチーRJP 理論を用いたキャリア教育の検討—」 (池野秀弘ゼミナール)
- (7)中山 徹郎 「買い物弱者支援事業の社会的効果と経済効果の推計」 (秋川卓也ゼミナール)
- (8)松井海都 「日本企業のデジタルプラットフォームビジネスについての一考察」 (坂本義和ゼミナール)
- (9)東野 隼空 「日本金融史における特殊銀行の役割とその展望」 1879–2021」 (Bytheway, S. J.ゼミナール)

3. 全体の講評

今回、9編の論文が優秀卒業論文賞として推薦を受け、前述した基準を十分に満たしていると判断され合格となった。合格とされた論文は、技術経営史、消費者行動、オンライン授業、就活市場、ブランド、地域銀行、金融史、観光産業、デジタルプラットフォームといったように、実に多様性に富んだものになっている。このような論文の多様性は、理論と現実の相互作用から生み出される学生の課題設定力に負うところが大きいですが、学生を指導している先生方の研究能力の多様性とも関係している。つまり、商学部の先生方の研究の幅と深さを示す証左ともいえる。

各論文は、研究課題の設定、研究方法、データの収集と検証という一連の正当的な学術的研究のプロセスを経て、妥当性のあるインプリケーションが導き出されている。とくに評価すべきポイントは、リサーチクエスチョンを解明するための研究の方法論が適切に選択されていることである。統計分析、事例研究、フィールドワークなど、テーマと同様に研究の方法論も多様性に富んでいる。このような学術的研究のプロセスを習得していることは、もちろん学生の努力もさることながら、ゼミナールの指導を2年からスタートし、4年生になるまでの3年間に渡ってじっくりと学生を指導できるという現ゼミナール制度の成果とも言える。

9編の受賞論文は、論文要旨と講評が商学部ホームページに掲載され、かつ、製本された論文が図書館に長く保管されることになる。ゼミナールにすでに所属する学生や、これからゼミナールの入室を希望する学生にとっても、優秀卒業論文賞の存在は非常に励みになると同時に、目指すべき目標となることは間違いない。今後も優秀卒業論文賞という制度が、各ゼミナールの知的活動を刺激するだけでなく、個々の学生諸君の能力を引き出せる場として機能することを期待している。